

時計のない村

小川未明

青空文庫

町まちから遠とおく離はなれた田舎いなかのことです。その村むらには、あまり富とんだものがありませんでした。村むらじゆうで、時計とけいが、たつた二つぎりしかなかったのです。

長い間ながあいだ、この村むらの人々ひとびとは、時計とけいがなくてすんできました。太陽たいようの上のほりぐあいを見て、およその時刻じこくをはかりました。けれど、この文明ぶんめいの世よの中に、時計とけいを用もちいなくては話はなしにならぬというので、村むらの中うちでの金持ちかねもちの一人ひとりが、町まちに出でたときに、その町まちの時計屋とけいやから、一つの時計とけいを求めたのであります。

その金持ちかねもちは、いま、自分じぶんはたくさんかねの金はらを払はらつて、時計とけいを求めもとめることを心こころの中うちで誇ほこりとししました。今日きょうから、村むらのものたちは、万ばん事の集あつまりや、約やく束そくの時間じかんを、この時計とけいによつてしなければならぬと思おもつたからであります。

「この時計とけいは、狂くるうようなことはないだろうな。」と、金持ちかねもちは、時計屋とけいやの番頭ばんとうにたずねました。

「けつして、狂くるうようなことはありません。そんなお品しなではございません。」と、番頭ばんとうは答こたえました。

「それなら、安心あんしんだが。」と、金持ちかねもちは、ほほえみました。

「この店の時間は、まちがいがないだろうな。」と、金持ちは、またきました。

「けつして、まちがってはいません。標準時に合わせてございます。」と、番頭は答えました。

「それなら、安心だ。」と、金持ちは思ったのであります。

金持ちは、買った時計を大事にして、自分の村へ持って帰りました。

これまで、時計というものを見なれなかった村の人々は、毎日のように、その金持ちの家へ押しかけてきました。そして、独りで動く針を見て、不思議に思いました。また、金持ちから時間の見方を教わって、彼らは、圃にいつても、山にいつても、寄ると時計の話をしたのであります。

この村に、もう一人金持ちがありました。その男は、村のものが、一方の金持ちの家にばかり出入りするのをねたましく思いました。時計があるばかりに、みんなが、その家へゆくのがしやくにさわったのであります。

「どれ、俺も、ひとつ時計を買ってこよう。そうすれば、きつと俺のところへもみんながやってくるにちがいない。」と、その男は思ったのです。

男は、町へ出ました。そして、もう一人の金持ちが時計を買った店と、ちがった店へ

きました。その店も、町での大きな時計屋であつたのです。男は、いろいろな形の時計をこの店で見ました。なるだけ、珍しいと思つたのを、男は選びました。

「この時計は、狂わないだろうか。」と、男は、店の番頭に問いました。

「そんなことは、けつしてございません。保険付きでございます。」と、番頭は答えました。

「その時計の時間は、合っているだろうか。」と、男はたずねました。

「標準時に合っています。」と、番頭は答えました。

「ねじさえかけておけば、いつまでたつてもまちがいはないだろうか。」と、男は、念のために問いました。

「この時計は、幾年たつても、狂うようなことはございません。」と、番頭は答えました。

男は、これを持って帰れば、村のものたちが、みんな見にやってくると思つて、その時計を買つて大事にして村へ帰りました。

もう一人の金持ちが、別の時計を町から買つてきたといううわさが村にたつと、はたして、みんながやつてきました。

「時計をどうぞ見せてください。」と、村のものたちが、口々にいいました。

男は、そういつてくるだろうと思つていたところへ、みんながやってきましたから、得意になつて、

「さあ上がつて見なさい。なかなか機械のいい時計なんだから、この時間ばかりは安心していいのだ。」と、男はいいました。

村のものたちは、時計の形が変わつていましたので、

「やあ、これは珍しい。」といつて、その時計の前に頭を集めてほめそやしました。

しかるに、不思議なことには、村に二つ時計がありましたか、どうしたことか、二つの時計は約三十分ばかり時間が違つていました。どちらが違つていいのか、だれもそれを知ることができないのであります。

「この時計は狂つていない。標準時に合つてゐるのだ。」と、一人の金持ちがいいますと、

「この時計こそ合つてゐるのだ。上等の機械で、町の時計にちゃんと合はしてきたのだ。」と、他の金持ちがいました。

二人の金持ちは、たがいに自分の時計を正しいといつて譲りませんでした。ちようど、

二つの時計は厳かなおきてのように、村のものは、二つに分かれて、一方は、甲の金持ちの時計を正しいといいました。一方は、乙の金持ちの時計を正しいといいました。

いままで、平和であつた村が、時計のために、二つに分かれてしまいました。時計は神さまのようになってしまったのです。

「今夜、六時から集まる。」と、いい合はしても、一方のものは、乙の金持ちの時計が六時になると会場に集まりましたが、一方のものは、甲の金持ちの時計が六時にならないので集まりませんでした。それで、三十分あまりも、二つの時計の時間が違っていましたから、前に集まったものは、後からきたものに対して、待たされた小言をいいました。

「俺たちは、ちゃんと六時にきたのだ。こちらの時計に狂いはないはずだ。それは、おまえさんたちの時計がまちがっているからだ。」と、後からきたものはいいました。

「いいや、私たちのほうの時計はまちがっていない。おまえさんたちのほうの時計こそまちがっているのだ。」と、前に集まったものはいいました。

こうして、時計によつて双方が争つたのです。

「待つてやつて、理屈をいわれるようじゃつまらない。さつさと時間がきたら、仕事を始めてしまうがいい。」と、早い時間を信ずる組は、遅れた時間を信ずるものにかまわずに、

相談を進めるようになりました。

こんなようなことで、つねに時間から、双方の争いが絶えませんでした。そのうちに、ふとしたことから、乙のほうの時計が壊れてしまいました。いままで、毎日まわっていた針が、まったく動かなくなってしまうのです。

神さまのように、その時計の時間を信じていた乙のほうの組は、その日から真つ暗になったように、まったく時間というものがわからなくなりました。

そうかといって、いままで、争っていた甲のほうへいつて、時間をきくのも恥と感じましたから、

「俺たちには、もう時間がないのだ。」といって、村の相談があつても、時刻がつねにまとまりませんでした。

甲の組は、さすがに、自分たちのほうの時計は狂わない正しい時計だと、いよいよその時計のありがたみを感じたわけです。こうなれば、乙の組のものも、こちらにしたがわなければならぬと思つていました。それで、相談があるときは、

「午後六時より。」というように、時間を定めて、乙のほうへ通知をいたしました。けれど、時計を持たなくなった乙のほうは、六時がいつであるかわかりません。こんなことで、

いつも相談そうだんが、はかどりませんでした。

時計とけいが二つあったときよりも、一つになったときのほうが、村むらのまとまりがなくなつたのです。甲こうのほうも、案外あんがい乙おつのほうが自分じぶんたちに従したがつてこないのを知しると、困こまつてしまつたのです。

「町まちへいって、時計とけいを直なおしてこなければならぬ。」と、乙おつのほうの一人ひとりがいました。

「直なおしたつてしかたがない。壊こわれるような時計とけいは、もう信用しんようすることができない。」と、他の一人ひとりがいました。

「そうすれば、どうしたらいいのか。」

「壊こわれない、いい時計とけいを探さがしてくるよりしかたがない。」

「そんな、いい時計とけいは、どこへいったら見みつかるだろうか。」と、乙おつのほうは、寄よると集あつまると口々くちぐちにその話はなしをしましたのであります。

乙おつの金持かねもちは、

「今年ことし、酒さけがよく造つくれたら、遠い町とちへいって、いい時計とけいを買かつてこよう。」といいました。そうしているうちに、ふと、ある日ひのこと、甲こうのほうの時計とけいも壊こわれてしまつたのです。自分じぶんたちのほうの時計とけいは、けつして狂くるうことはないといつて、いばっていましたがつい

にその甲のほうの時計も壊れてしまったのです。

「やはり、時計なんかというものはだめだ。すぐに壊れてしまう。信用のできるものではない。」と、一人がいますと、

「時計があつたつて、なくなつて、この一日には変わりがないじゃないか。」と、他の一人がいました。

甲のほうでは、乙のほうの時計も壊れてしまったのだから、いまさら、急いで新しい時計を、町へいつて求める気にもなりませんでした。

乙のほうでも、甲のほうの時計が壊れたと聞いて、いまさら、町へいつて新しい時計を求めるという気持ちが起こりませんでした。

村は、いつしか、時計のなかった昔の状態で、頼るべき時計がないと思うと、みんなは、また、昔のように、大空を仰いで太陽の上がりぐあい、時間をはかりました。そして、それは、すこしの不自由をも彼らに感じさせなかったのです。時計が壊れても、太陽は、けつして壊れたり、狂つたりすることはありませんでした。

「時計なんか、いらない、お天道さまさえあれば、たくさんだ。」といつて、みんなは、

はじめて、太陽^{たいよう}をありがとうございました。そして、集^{しゅう}会^{かい}の時刻^{じこく}も太陽^{たいよう}のまわりぐあいできめましたために、みんなは、また昔^{むかし}のように一致^{いち}して、いつとなく、村^{むら}は平和^{へいわ}に治^{おさ}まったということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「時計《とけい》のない村《むら》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

時計のない村

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>